

ヤンゴン素描 No. 32

インド西海岸ティボー宮

ラトナギリの丘の上に建つ宮殿の気品あるデザインに、ビルマ王朝最後の王ティボーの気骨を見る思いがする。



大英帝国は1857年にムガル帝国を亡ぼし、1885年ビルマのコンバウン王朝を滅ぼした。印緬二国の元首は交換され、それぞれの異境で没した。

ヤンゴン勤務時代にムガル皇帝バハドゥール・シャーの墓を訪ねた私は、インド南西部に来たついでに、ビルマ王朝最後の王ティボーの「宮殿」を見ることにした。

配流の地だからさぞかし不便なところだろうと想像していたが、ラトナギリの町はネオンサインや英語の看板が林立して、俗臭芬々。懐古にはやや興ざめな保養地だ。

「ティボー・パレス」現地名「ティーバー・ハウス」は海岸からも商業区からも離れた丘の上であり、クリークの一部は見おろせるが、外洋は見えない。

遠目にはビクトリア朝風のレンガ造りに見えるが、素材はラテライト、すなわちデカンの玄武岩が長年の雨と熱で赤く変性した天然のレンガである。その穴だらけな表面をレンガ色塗料で目留めをし、木枠やアーチの頂点の稜石などは白塗りでアクセントをつけている。

壮大ではないが貧相でもなく、均整がとれて愛らしい。居住性も悪くなさそうで、設計者の趣味のよさがうかがえる。

建物を所有する地方自治体の説明書によれば、設計にはティボー王自身が深く関わり、工事中も毎日のように来ては、こまかく指示したという。彼の西洋文化理解力は、すくなくとも建築に関して、そうとう深かったようだ。

同時代の英国人による記録では、ティボー王の人気は低い。気の強い妻スパヤー・ラ (SuPhaya Lat) の尻に敷かれた、無能で無気力な若者、というイメージだ。だが征服者はえてして被征服者を「自滅するしかない退廃者」と決めつけたがるものだ。私はこの宮殿にはある種の覇気を見た。

彼は決して暗愚ではなかった。それどころか、幼少期に送り込まれた仏教僧院では驚異的な成績を残した。もちろん僧院の座学が国家経営の役に立つとは思えないが、建築デザインの基礎にはなっただろう。世が世なら彼は後世に残るパゴダを寄進する立場にあった。

ティボー宮は目下補修中で、内装は一部しか見ることができないが、ウィキペディアには多くの写真が搭載されているので、ぜひご覧いただきたい。どこまでがイギリス人による設計で、どこにティボー王の希望が要れられているのか、想像するのも面白かろう。

ついでにティボー王の写真もじっくり見ていただきたい。これがはたして、時代に翻弄された無能者の顔か、それとも機会を狙い続ける反抗者の顔か。判断はむずかしいが、妙に惹きつけるものがある。

ところで私はたまたま、ボンベイ美術協会の創立 127 年回顧展のカタログを手に入れたのだが、そこに紹介された画家・彫刻家 91 人のうち、少なくとも 3 人がラトナギリ出身であることを知った。うち二人は第三次英緬戦争の前後に生まれていて、あるいはティボー王配流の影響があるのかもしれないが、ともかく、ラトナギリには芸術家を生みやすい何かがありそうだ。

インド西海岸はのっぺりとして、ムンバイとゴアの間にある港らしい港はラトナギリひとつである。西ガーツ山脈はモンスーンの影響を受けやすく、南北に走る幹線道路は湿潤な海岸低地を避けて、山脈手前の丘陵をうねうねと縫って走る。鉄道はもっぱら丘陵の中にうがたれたトンネルを直進する。その道路も鉄道も港町ラトナギリには降りて来る。

ティボー王の時代には今ほど保養地として栄えてはいなかったにせよ、「鳥も通わぬ地」ではなかった。蛇の生殺しのような生活のなかで、「宮殿」建設に意欲を燃やした最後の王の失意と気骨が偲ばれる。

(了)